

(西暦) 2020 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

学校適応に困難のある中学生の語り

—日本版青年・成人感覚プロフィールとインタビューより—

学位の種類: 修士 (作業療法 学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科 学域

学修番号 18896702

氏 名: 浦野飛鳥

(指導教員名: 伊藤祐子 准教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で, 本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

はじめに

近年, 中学生の学校不適応は教育問題の中でも重要視されている。登校拒否や不登校になる場合のみならず, 登校しながらも居づらさを感じて別室や保健室に登校する場合もある。その中でも発達障害の特性を背景とする学校不適応が指摘されている。文部科学省の調査によると知的発達に遅れがないものの学習等に課題がある中学生は全体の 4.0% を占め, そのため現状の要因解明と発達障害に係るより一層の研究が求められている。

そこで本研究では学校適応に困難があるの中学生にインタビューを行った。中学生本人の語りの分析を通してその体験と背景を理解し作業療法士の専門性を活かした感覚情報処理の特性や不器用さ等への支援を模索することを目的とした。本研究の意義は, 学校適応に困難がある中学生本人の語りを得ることで, 学校不適応の実際の体験を理解し, 学校教育領域の作業療法に新たな視点を提供することである。

方法

関東地方の放課後等デイサービス, 適応指導教室, 不登校ネットワークに所属する中学生を対象とした。インタビューの実施に先立ち, 中学生用メンタルヘルスチェックリスト (簡易版), 日本版青年・成人感覚プロフィールへの回答を求め, その結果を参考にしつつ, 各対象者に 2 回ずつインタビューを実施した。インタビューデータは質的データ分析法 SCAT の手法に従って, 各対象者それぞれの分析を行った。

本研究は 2019 年首都大学東京荒川キャンパス研究倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号: 19012)

結果

中学 3 年生男性 (対象者 A), 中学 2 年生男性 (対象者 B), 中学 2 年生女性 (対象者 C), 中学 2 年生女性 (対象者 D) の 4 名からインタビュー参加の協力を得た。

インタビューデータを SCAT の手法に従って分析し, 各対象者の理論記述の共通性と差異性を検討した。すべての対象者に共通性を認めた理論記述は感覚情報処理の特性に関わる内容であった。対象者 A は「感覚の過敏さを持つ中学生にとって教室の環境は落ち着かない」, 対象者 B は「感覚刺激への易反応性は学習を阻害する要因となり得る」, 対象者 C は「感覚刺激の感じやすさは学校適応や学習を阻害する要因となり得る」, 対象者 D は「感覚刺激に対する鋭敏な感じ方は学習を阻害する要因となり得る」などの理論記述が感覚情報処理の特性を示すものとして得られた。またこの他に, それぞれ内容は異なるものの, 運動の不器用さに関する理論記述がすべての対象者から得られた。

一方で、対象者 A の「自分の特性の理解は安心感につながる反面、新たな悩みとして将来への不安を感じる」、対象者 B の「鋭敏に雰囲気を感じ取ることと刺激への易反応性はともにコミュニケーションの苦手さに影響し得る」、対象者 C の「中学校の毎日は忙しく予定管理の苦手さが浮き彫りになる」、対象者 D の「感覚刺激に対する鋭敏な感じ方によって行事に与える影響は大きく、参加には当事者と学校の協力が必要である」は各対象者に差異性が認められる理論記述であった。

考察

1) 感覚情報処理の特性と学校環境

感覚情報処理の特性が学習や行事など学校生活への参加に影響を及ぼしているという内容の中でも、特に授業中の私語や休み時間中の大きな話声が気になるといった語りが対象者全員から得られた。突然の音に驚いたり、気になる声で居心地が悪くなり学習や集団参加に影響を及ぼしている様子が表れた。

これに対して、別室での学習やイヤーマフなどの対策をし、それによって集団参加を試みていることがわかった。これらのような、学校適応に影響を及ぼす学校環境の分析やそれに対する方策、環境調整の手段について作業療法の側面から支援できる可能性がある。

2) 運動の不器用さと学校適応

運動の不器用さに関する語りの内容はそれぞれの対象者で異なるが、主に実技科目に関する運動の不器用さと、階段昇降など日常生活の中の運動の不器用さに大別された。実技科目の難しさは、クラスメイトと自分の作品や競技の出来を比較して自信をなくす一因となっていることが読み取れた。階段昇降などの日常生活での運動の不器用さは、自分ではうまくやっているつもりなのに実際には転んだりぶつかったりすることが多いといった、自分のイメージと実際の運動の不一致を感じている様子が読み取れた。

実技科目や日常生活の中での体の使いこなしは作業療法の専門性を活かした支援の提案ができると考えられる。

3) 各対象者に特有の体験

①対象者 A：対象者 A は診断から安心を得た一方で将来への不安を感じているアンビバレントな理論記述が特徴的であった。中学生の時期は思春期の只中であり、Erikson の発達過程にもあるようにアイデンティティの形成過程である。この時期に自身への理解を深めながら他者と比較して自信を失う場面もあり、葛藤する様子が語られた。

②対象者 B：対象者 B のコミュニケーションの苦手さは「喋ることが苦手」などだけではなく、周囲の空気を悪くしないように配慮することで自分の気持ちを表現することを苦手と感じている様子であった。五感の過敏さだけではなく、目に見えない空気の感じ方が鋭敏であることからコミュニケーションの苦手さに繋がることを示した。

③対象者 C：対象者 C は学校生活に参加しているものの、生活の端々にやりづらさを感じていた。忙しい時期の慌ただしさが苦手であったり、趣味の読書に没頭するあまり教室移動などの流れに乗り遅れた経験を語った。発達障害の特性がある青年の時間管理の支援は就労支援の面で注目されるが、中学生にとっても支援が必要である可能性が示された。

④対象者 D：対象者 D は感覚情報処理の特性に関する困難が特に多く語られた一方で、学校と協力してその特性に向き合い、うまく行事に参加できたことが語られた。学校環境の調整など学校側の配慮は、感覚情報処理の特性を持つ中学生の学校適応にとって重要である可能性は感覚情報処理の特性の項目で指摘した通りだが、学外へ出る行事でも当事者と学校の協業は重要なポイントである可能性が示された。

結論

本研究では学校不適応状態にあると感じている通常学級在籍の中学生 4 名を対象に個別インタビューを行い、学校不適応の体験の分析を試みた。分析の結果から、学校不適応状態にあり、感覚情報処理の特性を持つ中学生にとって学校環境は音、匂い、光などの刺激に囲まれた環境である。感覚情報処理の特性は学習や行事参加、つまり学校適応に影響を及ぼすことがあることが示唆された。